

「知の総合化」が意味するもの

森 敏昭

前回は、赤・青・黄の3色の糸で編み上げることによって、総合学習を「真の学び」にするための実践事例を紹介した。では、総合学習が目ざしている「知の総合化」とは何を意味しているのであろうか。そのことをもう少し詳しく説明するために、今回はマイケル・ギボンズの「モード論」を紹介することしよう。

1. ギボンズのモード論

ギボンズは、学術研究の様式を「モード1」と「モード2」の2つに分類している。このうちのモード1とは、伝統的なアカデミズムの世界の研究様式を指している。すなわちモード1では、現実社会の問題に対する実践的関与の立場を離れて、高度に抽象化された非現実的な世界の中だけで論議が終始する。そして、そこで構築された理論が現実世界の切実な問題とどのようなかかわりを持つかが問われることはほとんどない。また、モード1では、学界という階層社会の内的倫理に従って研究の内容や方向が決定され、その研究成果は、学界によって正統性を認定された学術雑誌に掲載され、もっぱら閉ざされたアカデミズムの世界の内部だけで流通する。

これに対しモード2は、現実社会に対して開かれている。また、モード1では個々の学問分野の独自性が尊重されるのに対し、モード2では学問分野を越えた連帯が重視される。つまりモード2では、現実社会の具体的な問

題を解決することが研究の目的であり、その研究様式は、多様な学問分野を総合する協同的問題解決のアプローチなのである。

ギボンズは、以上のような分析に基づいて、これからの学術研究の様式はモード1からモード2へと脱皮すべきであると論じている。しかし筆者は、モード1の存在意義を根底から否定するつもりはない。なぜなら、問題の本質は、モード1とモード2が断絶していることであり、これからの学術研究に求められていることは、モード1とモード2の断絶を修復し、新たに「モード3」の研究様式を成立させることだからである。

そのモード3とはすなわち、モード2の世界で問題を発掘し、それをモード1の世界で分析・吟味・理論化し、それを再びモード2の世界に還元するという絶えざる知の循環システムのことを指している。そして、そうしたモード3のシステムを成立させるためには、何よりもまず、多様な学問分野の研究者たちが、それぞれの学問分野の垣根を取り払い、幅広い連帯の絆(きずな)を結ぶことが重要なのである。

2. 学習のモード論

さて、上述のギボンズの言説の中の「研究」を「学習」に、「学問分野」を「教科」に置き換えてみよう。そうすれば、学界の不毛性の構図と学校の不毛性の構図は同型写像の関係にあることが明らかになるであろう。つまり、

伝統的な学術研究の研究様式がモード1であるのと同様に、学校での伝統的な学習様式もモード1である。

すなわち、モード1の研究様式では個々の「学問分野」の独自性が尊重される（これを俗に「タコツボを掘る」と表現する）。これと同様に、モード1の学習様式では個々の「教科」の独自性が尊重され、教科の枠を越えての「知の総合化」がなされることはほとんどない。しかも、モード1の学習とモード2の学習が断絶している。つまり学校でのフォーマルな学習が、家庭や地域社会でのインフォーマルな学習（モード2の学習）と繋（つな）がっていないのである。このため、子どもたちには学習の意味が見えず、しばしば「歴史の年号を覚えることに何の意味があるのか」「物質の化学式を覚えても、それが何の役に立つのか」「因数分解ができなくても、大人たちは別に困っている様子はないではないか」などの疑問を抱く。しかし健気（けなげ）な子どもたちは、「試験でよい点を取るためだからしかたがない」と諦めて、ひたすら無味乾燥な知識の詰め込みに励むのである。そのような子どもたちの姿は正に、「この研究が何の役に立つのか」という疑問を密かに抱きつつも、「アカデミズムの世界でメシが食えるようになるためだからしかたがない」と自分自身を納得させて、せっせと学会誌に論文を投稿している多くの若い研究者たちの姿そのものではないだろうか。

要するに学校での学習を「意味ある学び」にするためには、バラバラに切り離された教科ごとの学習を総合すると同時に、「モード1の学習」を「モード2の学習」とつなげ（すなわち学習を生活とつなげ）、学習を情念・感性・知性・理性が生き生きと躍動する「モード3の学び」にすることが重要である。なぜなら、「知の総合化」とは、正にそのことにほかならないからである。

3. 「生きる力」の4要素

しかし、「知の総合化」を実践するのは決して容易ではない。そのためには力が必要であり、それがすなわち「生きる力」なのである。では、「生きる力」とはどのような力なのだろうか。筆者は、「生きる力」の構成要素は次の4つの力だと考えている。

第1は「I・AM」の力である。これは自分自身を知る力、すなわち、自分自身の良いところも悪いところもひっくり返して、自分自身を受け入れていく力である。言い換えれば、本当の自分自身から目をそらさずにそれを見つめる力、すなわち「情（なさけ）」の赤い糸をたぐり寄せる力ということになる。

第2は「I・HAVE」の力である。本当の自分を見つめることは、私たち大人にとっても、なかなか難しい作業である。したがって、赤い糸をたぐり寄せるためには、和の黄の糸とうまく縶（よ）り合わせていくことが大切である。そして、そのためには、心の鎧（よろい）を脱ぎ捨て、他者に心を開いていくことが不可欠である。つまり、「自分は独りぼっちではないんだ」「共に学び合う仲間がいるんだ」というように、他者との信頼関係を築き、学びのネットワークを広げていく力が必要であり、その力がすなわち「I・HAVE」の力なのである。

第3は「I・CAN」の力である。これは要するに問題解決力である。人間は日々さまざまな試練や問題に遭遇する。そうした試練を乗り越え、問題を解決していくごとに、人間の心は力強く、逞（たくま）しくなっていく。この試練を乗り越え問題を解決していく力が「I・CAN」の力にほかならない。

第4は「I・WILL」の力である。これは自分自身で目標を定め、それに向かって伸びていく力である。つまり、「I・WILL」の力とは、赤い糸（個性化）・青い糸（知性化）・黄の糸（社会化）のバランスを取りながら、学びの航海の舵（かじ）取りをする力なのである。（もり・としあき＝広島大学大学院教授）